



子どもの話を聞くとき

教頭をしている時のことです。3年生の担任が職員室で二人の子どもから話を聞いていました。どうも全校集会に行く前、教室前の廊下に並んでいる時にもめたようです。職員室でも「押した」「押していない」と言い争いをしています。

担任は、二人から丁寧に話を聞いていました。どうも押したのではなく、足がつまずいて後ろからぶつかったということのようです。ぶつかった時にすぐに謝ればよかったのですが、「押すな」といきなり怒られたので、つい「押していない」と言い返してしまったとのこと。その後はお互いに興奮して・・・。

喧嘩にならないようにするためには、どうすればよかったのかという担任の促しに、「ぶつかった時にすぐに、すぐに謝ればよかった。」と答え、その場で素直に謝りました。また、もう一方の子ども「すぐに怒らないで、何で押すの？」と聞けばよかったと付け加えました。お互い納得した様子です。

私は、職員室から出ようとした二人に、「今日のことを、おうちの人にどう話しますか？」と尋ねました。自分が分かったこと、納得したことを話すことで本人たちの理解も深まるし、保護者の方も安心されると思ったからです。

すると、一人がこう答えました。

「職員室で叱られた。」

担任が二人を叱ったわけではありません。丁寧に話を聞き、誤解があったことを気づかせ、どうすべきであったかを考えさせたのです。子どもも納得しています。

しかし、職員室での出来事をうまく説明することができず「叱られた」という言葉でまとめてしまったのです。改めて、子どもにとって自分が経験した出来事を説明することの難しさを感じました。

これは3年生の例ですが、高学年にとっても同じです。友達とトラブルになった時、その状況を的確に説明することはかなり難しいことです。語彙不足のために誤解を招いたり、断片的だったりします。また、誰でも自分に不都合な部分は話しにくいものです。無意識にその部分を抜けていることもあります。

ですから、何かトラブルがあった場合も、一方の話だけで判断するのではなく、双方から丁寧に話を聞くことが大切になります。

私たち大人が、このような姿勢で話を聞き、対応していくことが、子どもに状況を正確に捉える力、説明する力をつけ、問題を明らかにすること、それに対処していくことにもつながってと考えます。